

反障害通信

10. 2. 7

20号

三村洋明「反障害原論—障害問題のパラダイム転換のために—」

世界書院より発刊

とうとう政府文書に‘障がい’表記が・・・

以前から、地方自治体において‘障がい’ということばが使われていたのですが、とうとう政府関係文書にも‘障がい’ということばが出てきています。

意味不明な置き換えなのです。どうも‘害’という字はイメージが悪いから、‘がい’に代えようということのようです。

ずーっと以前から‘障がい’ということばがどのような意味をもっているのかをわたしは提起してきました。朝日新聞の「視点」という投稿欄に、故後藤勝美さんが書いた文もあります(註1)。そのような提起がどうもことばの置き換えをしているひとたちに届いていないようです。

そもそもは、‘障害’ということばをどうとらえるのかの問題があります。そこで、押さえて置きたいのは、イギリス障害学が突き出した「障害とは社会が「障害者」と規定する人たちに作った障壁である」という規定です。その規定を知っているひとならば、このようなことばの置き換えができるのでしょうか？ 実は、この規定に沿えば、今「障害者」と言われているひとはむしろ‘被障害者’と言われ、「障害者」に差別的なひとこそ、‘障害者’という名に値することになります。

何も、学の話を持ち出さなくても、簡単な話があります。「点字ブロックの上に自転車を置くと目の見えない人に障害になるよ」というとき、「‘害’という字はイメージが悪いから、‘がい’に代えよう」という話が成立するのでしょうか？ 自転車を点字ブロックの上に置くことは悪いということ指摘するといけないのでしょうか？ 悪くないとでもいうのでしょうか？ これは差別ということは良くないから、差別ということばを使うのを止めようというようなことです。それでは、どうして差別をなくせるのでしょうか？ (註2)

さて、そもそもイギリス障害学が今日いろんな批判にさらされているのですが、イギリス障害学が突き出した事の意義と意味をきちんととらえ返し、新しい理論を作り出していくことが今問われているのだと思います。

イギリス障害学がそのような規定を突き出してきた背景には、イギリスはパターナリズムが強く、「障害者」が慈愛や恩恵の対象としてとらわれていたということがあります。そ

の頸城から脱するために、その反転的提起が出てきたのです。だから、その地平を押さえられないと言うことは、「障害者」は同情・恩恵・慈愛という差別的な関係の中に甘んじて生きざるをえないということになります。それとも、「同情でもなんでも金をくれ(介助があればいい)」ということでもいいのでしょうか。「障害者」が命の危うさの中で、施設を飛び出し、親元を飛び出して自立生活に踏み込んでいった地平はどこへ行ったのでしょうか？

ことばの置き換えをしているひとたちには現実にある差別をきちんととらえ返さず、そのことをあいまいにしている、反差別の姿勢がない—希薄だから、ことばの置き換えで問題を曖昧化させようとしているとしかわたしには思えないのです。

今、イギリス障害学の持つ意味をとらえ返し、その限界を乗り越える新たな理論の構築をする中で、ことばの置き換えではない、障害（「社会モデル」的意味での障害）をなくしていく活動が今こそ必要なのだと思うのです。

このことばの置き換えは「障害者」を差別を排除型の差別としてとかとらえられず、もうひとつの抑圧型の差別（「努力して障害を克服しようという」という言葉で端的に表し得ます）の中にとどめていく危うさを持っているとわたしは感じるのです（註 3）。だからこそ、今こそ、きちんとした議論をしていこうよ、と提起します。

註

1

朝日新聞 09.1.23 の「私の視点」への投稿記事 3 P に転載

2

日本における反差別運動で先駆的な役割を担った部落解放闘争において、寝た子を起こすなというようなこと、「差別、差別というから差別が続いていくのだ」というようなことを融和主義として批判してきました(融和主義批判は 三村洋明『反障害原論』126-128P)

3

差別の型については 三村洋明『反差別原論—障害門だのパラダイム転換のために—』世界書院 の 8 章差別形態論で展開しています。参照してください。

HP 更新通知・掲載予定・

◆「反障害通信 20 号」アップ(10/2/7)

◆三村出版本に対するオープンな批判・意見をこのホームページに掲載していきたいと思っています。とりあえずリアルなやりとりをブログでやりたいと思っています。「対話を求めて」というカテゴリーを作りました。そこの「本を出版しました」にコメントという形で応答して下さい。

ブログのタイトルは「たわしの雑感&読書メモ」

URL は <http://blogs.dion.ne.jp/hiroads/>

私の視点

siten@asahi.com



◆行政用語

障害を「障がい」とする意味は

う。果たしてそうだろうか。

聴覚障害者である私も、「障
害」や「障害者」の表記は必ず
しも適切とは思っていない。障
害や障壁に立ち向かう精神を表
すような、よい言葉がないかと
思う。だが、まだ日本語には適
切、的確な言葉がない。かつて
「障壁」「障碍」という言葉が
取りざたされたことがある。だ
が、この字も「さまたげる」と
いう意味で適切とは言えない。

この社会には、あらゆる面で
不便、不自由を強いられている
人がいる。例えば、目の見えな
い人は道に物が置かれているた
めに自由に安心して歩けない。
耳の不自由な人は手話通訳が有
料で困っている。車いすの人は
いつでもどこにもスムーズに行
くことができない……。マスコ

ミはよく「障害を乗り越えて」
と書くが、障害に「負けない」
のであって、「乗り越える」の
は、ほぼ不可能に近い。

こうした問題は、社会環境や
政策的不備で起きている不自由
さであり、それこそが「障害」
なのである。言い換えれば、そ
ういう人は「社会的被害者」と
言えるし、「害」には、その意
味が含まれている。

この被害を取り除いていくこ
とが必要なのだ。単なる言葉上
の問題ではない。「害」を平仮
名に変えたところで、前述の社
会的被害は何一つ変わるわけ
もない。それどころか、その被
害をあいまいにし、あげくの果
てに「害がなくなった」という
風潮を広める危険を覚える。

この変更を、障害者を最も理
解すべき福祉課が決めた経緯に
も、疑問を感じている。
県や市に尋ねたところ、変更
すべきだという意見は、一部の
住民からの提案だったという。
障害者団体の中には反対意見も
あったが、当事者の意見を聞い
たり議論したりすることに、十
分な時間や手間はかけられなか
った。「不快に思う人が1人で
もいれば」ということだけでは
変更の理由にはならない。

そんなことよりも「害」を取
り除く具体的な施策の方がずつ
と大事だ。これは行政も障害者
も万人の共通した認識だろう。
私は、障がい者にあらず、障
害者である——。この世に障害
が感じられなくなる日まで、言
い続けたい。

投稿は、〒104-8011
朝日新聞声・主張面「私の視
点」かsiten@asahi.com
へ。電子メディアにも収録し
ます。

お知らせ

◆ホームページは横書きのテキストファイルに近い形で作成しています。印字でうまく出ないとき、読み込めないときはメールで連絡ください。また縦2段組みで印刷したものもあります。こちらが欲しい方も連絡もらえれば、メール・郵送にてお送りします。

読書メモ

ブログで継続していたのを同時掲載にします。

たわしの読書メモ・・ブログ 68

・木村敏『自分ということ』ちくま学芸文庫 2008

『あいだ』ちくま学芸文庫 2005

『分裂病と他者』ちくま学芸文庫 2007

久しぶりの読書メモです。

突然の引っ越し、本の出版、もろもろのごたごた。で、本が読めないでいました。

どんどん積ん読本が増えていきました。しかも、読んでいる本が哲学と精神病理学の架橋という木村さんの本。遅々として進まず、内容もつかめないうまに読み進め。どうも、読む順番も間違えたようです。最後に読んだ本を最初に読めばもっと前の二冊が読み込めたのではとの思いもあります。それでも同じ著者の本、輪郭がおぼろげなりとも掴めてきました。

それと、逆にこれらの本がわたしが基礎学習として読み落としている、フッサールやハイデッガーの論攷の概略なりを逆照してくれて、刺激的なことがありました。基礎学習をもう一度やりなおさなければという思いとともに。

実に検討していくべき課題がたくさんあるのですが、まだこなせていません。一度廣松さんのフッサールやハイデッガーへの論攷を読み直しつつフッサールもちゃんと読み、ハイデッガーもと思っただけは広がっているのですが。

メモ的に残せることとしては、木村さんのおのずから、みずからという意味での自発的意志を突き出しているのですが、その自発的意志の物象化と実体主義に陥っているのではないかと。

四肢構造論による共同主観性論で三項図式を超えようとした廣松さんの地平からするとフッサールやハイデッガーが果たして三項図式を超えているのか、そしてそれを精神医学に援用している木村さんは・・・という疑問を持ちつつ読んだこと。

また、医師としてのひきずられは起こしつつも、筆者も出会った反精神医学の地平はおさええているところで、きちんと向き合うという姿勢をもちつつ、「精神病」を否定的にみないということとも志向しつつ、それでも医師の立場がというところでの・・・。

もう一度読み直しつつ、まとめる作業をしなきゃいけないし、そもそも認識論的に深い内容をもちつつ、それを精神医学というひととひととの出会いの場で論じているという問題も含めて、こういう形で読書メモを終わるようなことではないのですが、後ろ髪引かれる思いで木村さんの次の新書版へと進みます。

この際、廣松さんのフッサールとハイデッガーへの論攷を押さえておきたいし、フェミニズムでの性差に関する本を数冊、障害関係の生きるということでの論攷二つ、介助関係の本、そして情動的な本で読んでおきたい本、積ん読の山に頭を抱えています。

本を出版して、そこでの議論もきちんとしていきたいし、・・・。

あせらず少しずつ進めます。

・木村敏『異常の構造』講談社現代新書 1973

やっと本が読めるようになってきました。木村さんの本はちくま学芸文庫の4冊に続いて5冊目です。

ちくまのときには、やはり彼は医者立場に引きずられているという思いが強かったのですが、この本は、丁度この本が出版されていた頃は、反精神医学が一番影響力をもっていたころ、彼もこの頃が「分裂病」（本が出された当時の表現、今は「統合失調症」という表現に変わっています）を異常としてとらえることをときには反転させながら、そもそも異常とは何か、という問いを發し、その元の思想としてある「合理性とは何か」というところから、この本を書き進めています。

で、「障害の否定性」の否定というところから論を進めんとするわたしとしては、まだ何冊しか読んでいないのですが、この本が一番共鳴し得る本になっています。

いくつかの疑問、他の本にも出ている共通感覚という言葉、これはマッハの感覚の束ということを連想させるのですが、むしろ共同主観性の物象化といえることではないかとなどとふと忘れてしまったのですが。

それから、せっかく合理性の批判をしているのに、「合理性」ということを生への欲求ということに根ざすこととしてとらえ、「分裂病」を生への欲求が希薄になっていることとしてとらえるようなところはちょっと理解しがたものがありました。むしろ、生の欲求のあり方が抑圧の中でそれへのアンチとして別な形で現れてきていることとしてとらえられないのでしょうか？ このあたりはわたしの読み違いがあるのかもしれませんが。

もうひとつの疑問は、どうも「発症」の直接の原因を家族の問題に絞っている、絞っているというか、この本の中ではそこでしか論じていないのですが、むしろ抑圧の中で家族からの抑圧が顕著に表れるという問題で、「個」－「一」の形成過程において家族関係が大きいとしても、むしろ抑圧ということを見て取る必要があるのではないかと思います。（この「一」と「全」という関係の読み解きは、「全」を異化する以前の事として読み解き、そこから認識の「自己」の異化する以前の「全」というところにつなげていく論攷は、廣松さんの「むしろ「病者」といわれるひとたちの認識が原基ではないか」という論攷との木村さんの共有化ともつながっています。）

こういうことを書くのは、繰り返しますが「障害の否定性」の否定というわたし自身が持ち続けているモチーフにつながっているからです。わたしは「障害の否定性」の否定を突き出したときに、「病」者サイドから出される、「病」は苦しいという提起をどうとらえればいいのかという問題をずっと抱えてきているのです。

わたしは「病」は苦しい」ということの中身をとらえ返す作業が必要なのではないかと思うのです。とりあえず、抑圧の中で「病」が起きてくる側面から、抑圧－差別はいやだと言いつけるから、そこでの苦しさを取り除こうと言えらると思ふのです。さて、抑圧がなくなると「病」がなくなるのかとかいう問題もあり、そもそも何らかの抑圧はありつづけるのかという問題が残るのですが。わたしは「差別はなくなる」という論断は臆断で

はないかと批判しているのですが、差別とは言えない抑圧はあり続けるのでしょうか？ 抑圧ということなしに「病」はありえるのでしょうか？ わたしはそのあたりはむしろ「知的障害」とか「認知障害」とか規定されているひとたちの認識の構造につながり、そこで生まれたままの認識の原基的形態といわれることがあり、そこにそのものの苦しさはないのではないかということをおもったりしているのですが、そのあたりの整理はまだわたしの中でもできていません。

筆者はあとがきの中で、反・反精神医学を標榜するに至っているのですが（これは反精神医学的などところにもっとも接近する中での論攷で、病者の世界から「病」ということを見る必要、医者は結局そのことができないという自己否定的な反精神医学の立場を突き出して見ます。現在のにはもっと治療論に引きつけられているようですが）、これは結局「苦しい」ということの中身の検証として、「病」者の当事者サイドから提起して欲しいと思っています。一度意見を聞きながら、そのあたりの煮詰める作業の手伝いができないか、そこから自らの「障害の否定性」の否定の論攷を進めたい・深めたいと思ったりもしています。

雑感

老いと障害問題

昔から、「障害者」が、自分たちのことを考えようとしないう非「障害者」によく言っている言葉があります。「あなたたちも歳をとったら障害者になるのよ」。わたしはこのような提起は届かないとかねてから言っていました。

というのは、「障害者」の存在を考えようとしないうひとたちは、「ひとの世話になるなら（障害者のようになるなら）、ぽっくり死にたい」と思っているからです。で、「ぽっくり死ぬ」ひとは少なく、結局、自分が歳をとったら、こんどは若い人たちに「あなたも歳をとったらわたしの気持ちが分かるわよ」という言葉をなげかけることとなります。「障害者」に対する自分が持ってきた、持っている差別的考え方が、自分で自分の首を絞めるようになってきて、介助が必要になったときに、周りのひととの関係が作れなくなるのです。

さて、「あなたも歳をとったらわたしの気持ちが分かるわよ」というとき、その気持ちというのは何でしょう？

それは歳をとることによってできなくなることが増えていくということでのつらさということではないでしょうか？

実は、そこに勘違いがあるのです。歳をとってできなくなることがつらいなら、そもそも「障害者」といわれるひとはできないことがあるとして「障害者」と規定されていたのですが（「中途障害者」と言われるひとで引きずっているひとはいるにしても）、できないことでのつらさというのはそもそもそこにあっただけではないでしょうか？（往々にして「刷り込み」というようなことでつらさを感じているひとがいるのですが。）

そしてもっと根本的に考えれば、どうして、できなきやいけないのか、しかも、往々にして独りでという断り書きがつくのか？ そもそも「障害者」はできないひとなのではし

うか？ むしろひとの手助けを得ているんなことができると言えるひともいるのです。

ここで、かの「歳をとったら、障害者になるのだから」という提起が届いていかないというのは、未来に対する想像力とその欠如を問題にすることなのですが、単に想像力の問題でもありません。ひとつの問題は、そもそも未来のことなど考えられない現実のきびしさが、刹那的になっている現実もあります。もっとも大きな問題は、障害問題とされていることを自分たちの抱える問題とつながっているということがとらえられないことがあります。

よく、「日本は良い、何で社会を変えようとか言うのだ、不満を言うのだ」というひとがいます（いました）。で、そういうひとが、幸せな人生を送っているかということ、いろんなことでむしろ悩んでいる現実が多々あります。そもそも自分がいろいろ抱えている問題を、運命とか自然の掟とかとらえて、解決できない問題として、そこに解決していく問題があるということさえ、とらえられないひともいるのです。

「障害者」に対する差別的考えが、歳をとったとき、自分で自分の首を絞めることになる、と書いたのですが、確かに自分の考えなのですが、それは周りの考え、広く社会に広まっている考えを自分も身につけたということなのです。ここ数年、問題になっていたことに「後期高齢者医療制度」がありました。これが姥捨て山の思想だと批判されていたのですが、そもそも広く社会にある「人の世話になるならぼっくり死にたい」という考えがそもそも姥捨て山の思想とつながっていて、その考えが「後期高齢者医療制度」の創設を可能にしたのです。

「人の世話になるなら、ぼっくり死にたい」ということを実行したのがナチスドイツの「精神障害者」の虐殺だったのですが、それはファシズムといわれることだけでなく、福祉の先進国での断種手術や自己決定の尊重という名を借りながら「安楽死・尊厳死」法が施行されているということにも現れています。

そして、もっと深くとらえ返していくなら、「障害はないにこしたことはない」とか「できないより、できるにこしたことがない」という緩やかな優生思想とでもいうべきところで、広く根を張っているのです。

わたしはそこまで掘り下げた批判が必要だと、認識論的なことも援用しながら、論を煮詰めてきました（今回の本の出版もそのひとつの過程です）。

それは青い芝が鋭く告発した「健全者幻想」であり、また、「障害者運動」がそれにつながる優生思想として批判してきました。

高齢者の問題を論じるひとが多分に老いをどう生きるのかというマニュアル的なところに流れていく傾向があるのですが、わたしはむしろ高齢者の問題を生み出している構造を問題にして行かなきゃいけないと思うのです。

現実に老いを生きる、そしてその老いを生きるひとを介助するというところで、気持ちの持ち方を転換していく必要があるし、現実のせめぎあいもおきてくるのですか、そもそも気持ちの持ち方がそんなに簡単に変わるわけなし、ひとりひとりの気持ちの持ち方を変えるには、みんなの考え方を変えなきゃいけないので、そんなに簡単に変わるわけがないのです。それでも現実の試行錯誤はつづくのですが、・・・。

そのことは障害問題でも通底して、そして代表するような性格があるのではと思うのです。だからこそ、「障害者の生きやすい社会はみんなが生きやすい社会である」という提言があるのです。

だから最初の「あなたたちも歳をとったら障害者になるんだよ」という提言は、「わたしたち「障害者」の抱えている問題はあなたたちの今抱えている問題に通底していて、それがあなたたちが高齢者になったらより如実に現れてくるのですよ」という提言として整理できることではないか、と思います。

(編集後記)

◆隔月刊が少し遅くなりました。次号は少し早めに出します。

◆‘障がい’表記については、きちんと働きかけでいきたいと思っています。合理的配慮を巡る議論と双壁の課題として取り組みます。

◆巻頭言に朝日新聞への投稿文を貼り付けましたが、投稿された後藤さんは、この文を遺言にされたかのように数ヶ月後に亡くなりました。

合掌

◆本『反障害原論』は議論のために出したこと。批判・意見を貰う中で運動のための理論的深化と広がりを目指していきたいと思っています。よせられた批判意見は、本人の確認をもらえたら、この「通信」にも掲載誌、議論を起こしていきたいと思っています。

◆本の出版に追われて積ん読している本を少しずつ読み進めていきます。今、「精神障害」関係の本を今読んでいます。「障害の否定性」の否定において、抱えている課題として、当事者との対話を求めながら、煮詰めたいと思っています。フェミニズムの「性差とは何か」とかで理論化していたのですが、その関係で新しい本が出ています。これも早く読みたいとあせっています。状況関係の本も読みながら、障害概念の拡大の中で運動的な広がりも求めて生きていきたいと思っています。

◆雑感、わたしの生活の中で感じていた試行錯誤の痕跡です。

反障害研究会

新しい出発に関して二項目を追加しました。

■会の性格規定

今、‘障害’という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がりを目指していきたいと思っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

E メール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HP アドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>